

2011.5.23 Mon

春学期小熊研究会

本田由紀 多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで

71050162/t10017iw 環境情報学部2年 和田尉吹

【著者について】

<略歴>

1983年香川県立高松高等学校卒業

1983年東京大学教養学部文科三類入学

1989年東京大学大学院教育学研究科博士課程入学

1994年同博士課程単位取得退学、日本労働研究機構研究員

2001年東京大学社会科学研究所助教授

2003年東京大学大学院情報学環助教授併任（2006年まで）

2007年東京大学大学院教育学研究科准教授

2008年同教授

<専門・主義思考など>

・専門は教育社会学

・しかし、どちらかというと言説が多い。ニートの問題ではその概念の曖昧さを指摘。就職の不公平さ、社会構造や労働の質の変化に対応できないという理由で、新卒採用を批判。

【主な著作】

・若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』2005年

学校経由の就職の問題点の指摘やフリーターの分析を主に扱う。日本の人格形成中心の教育と社会（企業）の精神がうまくあっていないことを指摘。若者が生きてく上で必要な翼（特定の仕事をうまくでき、それにより一つの存在感を発揮できる具体的知識や能力）を持つために教育の職業的意義の回復を提言する。

・『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』2005年（第6回大佛次郎論壇賞奨励賞）

・『「家庭教育」の隘路—子育てに強迫される母親たち』2008年

・『軋む社会 教育・仕事・若者の現在』2008年

作者の書いた新聞や雑誌の記事を集めたもの。90年代後半からの社会構造の変化に、若者が翻弄され、苦しむ構造を分析。さらに現代がそれを人間性の欠如や自己責任ですべてを片付けようとするところに問題があることを指摘。

・『教育の職業的意義』2009年

・学校の「空気」2011年

【多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで

の内容】

<まえがき（問題提起・方針）>

最近、「OO力」（ex.就職力、脳力など）というタイトルの本を良く見るようになった。そこから現在の日本社会は「力」を渴望していることがわかる。つまり能力の多元化という現象が如実に表れてきている。

その傾向や問題点をハイパーメリトクラシーというキーワードを手がかりに読み解いていく。

<序章>

従来のメリトクラシー(近代型)・・・学歴(学力)など手続きの公正さが人々の社会的位置づけを決定する。

ハイパーメリトクラシー(ポスト近代型)・・・ポスト近代化によるメリトクラシーの発展形態。場面における個人の実質的有用性に則される傾向。

近代型能力・・・基礎学力、標準性、知識量、順応性、協調性...

ポスト近代型能力・・・生きる力、多様性、意欲、創造性、個性、能動性、交渉力....

ポスト近代型能力は重視されつつあるが、近代型能力の意義が現在でも薄れたわけではない→両者が混在する現在

「ハイパーメリトクラシーの実像を十全に把握するためには『社会的地位』という概念を従来のような職業や収入、階層などから、人間関係や自己意識、生活満足感などを含むさまざまな側面へと拡張して考える必要がある。」(p.28)

<第1章:ハイパーメリトクラシーの諸相(言説)>

～ハイパーメリトクラシーの流れ～

(学校) 教育:特定分野に突出するのではなく万遍的に質の高い人間を育成→知識の量が多いが目標設定が不明確な”創造的人材”

今後は・・・主体的に行動し、自己責任の観念を含んだ創造力あふれる人材→”創造的人材”の設計よりより詳細

教育だけでなく政治経済もそれぞれが求める人材にどれも相似性がみられる。

→ハイパーメリトクラシーの大合唱(p.72)

問題:我々のものの見方が一色に収斂しつつある。

解決のプロセス:ハイパーメリトクラシーを相対化し、新たな道を模索する必要がある。

<第2章:小中学生のハイパーメリトクラシー>

一昔前の主流(90年代前半):機械的になりがりと努力する”閉じた努力”

今の主流(05年):環境によって自分のあり方や目標を自ら選びそれに向かい努力する”開かれた努力”→努力は能力の一部として見なすべき。

子どもにとっての「努力」が必ずしも「勉強」だけに向けられるものではなく、環境からのさまざまな刺激や圧力のなかで自分のあり方を維持するというこも、重要な「努力」の構成要素(p.84)→頑張る対象が変化し多様化

・過去10年の子供の変化

①生活習慣のゆるみ②親との会話内容の私的領域化③親からの期待の希薄化④勉強(時間)の後退⑤友達が多いと感じる度合いの低下(p.95)

これらが子供の努力と大いに関係

<第3章:高校生>

・メリトクラシーの弛緩と対人能力の重要化

一昔前(80年前後):中学生の学力に基づいた各高校への振り分け。さらにそこで振り分けられた各「ランク」の高校内での高校生の学力に基づいた高校卒業後の進路の振り分け。

今(00年前後):勉学の姿勢低下、自分の学校への誇り、親の期待に応えるための勉強がなく

なる。つまり高校という生活の場のウェイトが低下。

価値観が変化し、メリトクラシーが弛緩。

情報網の発達で学校の囲い込み（拘束力）効果が低下。

・国際比較

～学校への意識～

日本:自由な生活を楽しむこと→メリトクラシーからはずれる傾向 ”多元的思考-選択的分化”

韓国:進学知識・礼儀など近代型能力を身につけること”一元的思考-強制的分化”

“多元的思考-選択的分化”・・・出身家庭の社会階層の影響を受けやすい。

～ハイパーメリトクラシー下の今日～

・個性が重視される（他者に自分を個性的と承認してもらう必要性）

・対人化（友人関係が広く深く）

→コミュニケーション能力が逆に高度化、そして学力の高い人間ほど対人能力が高い。

<第4章:6つのライフスキルと社会地位の達成(若者)>

・社会地位

一昔前:学歴、所得、職業

今:財や生活様式の「上下」に関する軸がぶれる。生活の多様化による独自の意義主張。→あいまい

社会的排除の状態・・・失業、貧困、孤立、無力感あるいは逸脱的行動などにより、社会の一員になれない状態のこと

社会的包摂・・・個々人はその社会的存在を構成する諸側面の中で特定の部分については社会的”包摂”されつつ、別の面では排除されている。

このような多元性によって社会的地位の実態があいまい。

「学校を出てすぐ正社員として就職し、やがて結婚して一家を構えて子どもをもつという単直線的な『大人』への筋道が見えにくくなっているのだ。」(p157)

・学生以外の若者

「ライフスキル」・・・社会的地位に影響を及ぼす可能性がある「能力」ないし「スキル」のこと

①家事スキル・・・衣食住

②テクニカルスキル・・・対人コミュニケーション、コンピュータスキル

③メンタルスキル・・・メンタルの強さ、ポジティブ、ネガティブ、有能感

～ライフスキルの分析～

①・・・女性は年齢とともに増加（男性は違う）

②・・・男女ともにコミュニケーションスキルより、コンピュータスキルのほうが高い。

③・・・女性はネガティブ、男性はポジティブかつ有能感をもつ傾向。

～ライフスキル相関関係～

-ライフスタイルを左右する要因”家族”-

・家族が経済的に豊かなほど、どのライフスキルも平均的に高い

・家族の親子関係が密接なほど③の有能感のポイントが高くなる。

・家族との同居で①のライフスキルのポイントが減る

-相乗関係-

・③のポジティブと②のコミュニケーションスキル

・②のコミュニケーションスキルとコンピュータスキル

両方高い場合が多い→密接な相乗関係

-新たな傾向-

学歴や労力などの近代型能力と収入とが相互に関連していない

→メリトクラシーの後退（ハイパーメリトクラシーの浮上）

～青少年のライフスキル向上と「社会地位」の獲得のために何が必要か？～

- ・男性の家事スキルを増大させ、女性の家事負担を減らす。
- 男女の職業面家族面でのバランスのとれた社会的地位の獲得
- ・コンピュータスキルのUP+知的能力
- 「教育達成から職業達成へ」というメリトクラシーの枠組みに合っている。それに加わる豊かな人間力
- ・ネガティブ、ポジティブ、有能感のバランス

<第5章:母親のライフコース>

～パーフェクトマザー～

男性である父親の長時間労働従事で子供にかかわり合う時間がない。そこで母親に「中身そのものが極めて広範囲かつ高濃度な子育て」が要請される。

Ex.甘やかし過ぎず放任しすぎない微妙な親子関係を組み立てることによって子供の「人格形成」をリードする

～少子化対策効果なし?～

母親の育児負担に関する議論は存在しても、それらが、主に問題としてきたのは乳幼児期における最低限の制度的経済的支援や育児の心理ストレス。

しかし、子供が学齢期になってから後にも継続する母親による日常的な細かい配慮が注目されていない。

～少子化の理由～

- ・子どもが現代社会において、不利な状況に落ち込まないように育てる難しさ
- ・母親にとっての多大な負担の予測

「高い学歴を得れば、収入面で恵まれる」、「学歴は親の教育方針で決まる」（近代能力を重視しつつ、ポスト近代型能力も視野に入れる親）→子どもがいない

「学歴は本人の実力で決まる」（放任主義的な親）→子どもあり

ハイパーメリトクラシー化が女性の子どもを持つ or 持たないの選択を左右している。

～ハイパーメリトクラシーの圧力が生んだパーフェクトマザーからの脱出方法～

- ①別のエージェント（つまり父親）に子どものポスト近代化能力育成を分担→父親もパーフェクトファザーに→厳しい？
- ②ポスト近代能力育成の機会を設ける
- ③ハイパーメリトクラシー化を食い止める

<第6章:対処法（まとめ）>

メリトクラシー下・・・人々は自分の柔らかい内面は保持したまま「近代能力」を獲得できた。

ハイパーメリトクラシー下・・・個々人の何もかもをむき出しにしようとする視線が社会に充満→常に気を許すことはできない

～0番目の対処法～

だめな自分を許容して、地位達成を志向せずに最低限の生活費のみをなんとか調達し、身近な人間関係だけで生きて行く方法

メリット:自由に自分らしく生きれる

デメリット:根本的な解決にならない。Ex.生産性が低下

～ポスト近代能力育成の機会を設ける方法～

①家庭・・・それぞれの家庭でポスト近代能力に差→そのあいまいさが親と子の関係を息苦しいものに。

②地域・・・行政では提供できないような多様かつ柔軟な相互支援のあり方ができる？
→ポスト近代能力の地域内格差。または集団主義が押し付けられる。

③学校・・・家庭や地域よりも明確な制度、つまりはコントロール性が高い？

→しかし、ポスト近代能力と学校制度の構造的差異 ex.教師と生徒の人数比に限界があり、十分な配慮が不可能

～ハイパーメリトクラシー化を食い止める方法～

専門性をつける・・・ハイパーメリトクラシー下では意識的かつ創造的でなければいけない。しかし、これによって自らの専門性という一定の枠組み内でのみある程度意欲的かつ創造的であればよい。

-メリット-

- ・一定の学習期間で習得可能
 - ・専門性という内容で結ばれた共同体に個人が属する。→対人的つながり、コミュニケーション力がUP
 - ・アイデンティティの形成
- やりたいことと現実社会の需要を冷静に判断
- ・責任感や自己効力感の育成

デメリット:専門性をつけることができないまま社会に出る者が一部、あらわれる可能性

「ハイパーメリトクラシーの渦中に無防備な柔らかい状態のまま放り出され、蹂躪されるのではなく、一定の足場に自らの足をつけ、一定の『鎧』を装備した上で、戦ってゆくことができるようになるだろう」(p270)

しかし、あくまでこれは1つの対処法。もっといろいろな対処法が提起されるべき。

【参考文献】

Wikipedia <http://ja.wikipedia.org/wiki/本田由紀>

本田由紀 軋む社会 教育・仕事・若者の現在 (双風社、2008年)

同上 多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで (NTT 出版 2005年)

同上 若者と仕事——「学校経由の就職」を超えて』(東京大学出版、2005年)